

司馬遼太郎『街道をゆく40 台湾紀行』から見える台湾

1. 台湾とは

福建省の東方200 km、面積3万6千km²(九州ほど)、人口2300万(近畿ほど)。

呼称 / 「タイワン」は、原住民の言語、「タイアン (Taian)」(来訪者の意)の転化か。

「台湾」と慣用されるようになったのは、明代後期。

2. 歴史 (「台湾略年表」筆者作成)

1544(推定)	ポルトガル船、台湾を「発見」 「Ila Formosa! (イラ・フォルモサ! "麗しき島")」と感嘆
17世紀以降	大陸から台湾へ、漢人系移民はじまる
1624	オランダ、台湾を占領。ゼーランジャ城、プロビンシャ城築造
1626	スペイン、基隆ほか台湾北部を占領
1642	オランダ、スペインを追放
1661	鄭成功、オランダを追放
1683	鄭氏政権、清国に降伏。翌年、清国は台湾に福建省台湾府を置く
1721	朱一貴の乱 ※「-25嘉義で思ったこと」で言及
1786	-87年、林爽文の蜂起 ※「-25嘉義で思ったこと」で言及
1874	日本、台湾出兵 日本の出兵ほか、この時期、清国統治下の台湾で、新旧キリスト教の布教、台湾人の蜂起などがあり、清国は台湾経営を転換、積極政策に
1885	台湾、福建省から独立して台湾省に
1895-1945	日清戦争の講和条約、下関条約にて、日本の統治下に
1898	第4代児玉源太郎総督並びに後藤新平民生局長着任
1908	台湾縦貫鉄道(基隆~高雄)全通
1928	台北帝国大学開校
1930	嘉南大圳(かなんたいしゅう)竣工 霧社事件(先住民が日本人を襲撃)
1931	嘉義農林学校チームが甲子園で準優勝
1937	皇民化運動はじまる
1940	改姓名はじまる
1942	最初の台湾人志願兵入隊 ※「-28浦島太郎たち」で言及
1944	台湾人に対する徴兵制実施
1945	第二次世界大戦終了 連合国軍は国民党軍に台湾占領を命令 国民党政権の部隊と公署の人員到着
1946	大陸では国共内戦が再発
1947	二・二八事件
1949	戒厳令施行 蒋介石、国共内戦で敗北、首都南京を脱出、重慶、成都などを経て、12月、息子の経国とともに台湾着
1971	中華民国(台湾)、国連脱退
1972	日中国交正常化により日本と断交
1975	蒋介石死去
1978	蔣経国、総統に就任
1987	戒厳令解除
1988	蔣経国死去 副総統の李登輝が総統に昇格
1996	初の総統直接選挙で李登輝が当選(~2000)



再現された日清講和条約締結会場
日清講和記念館HPより

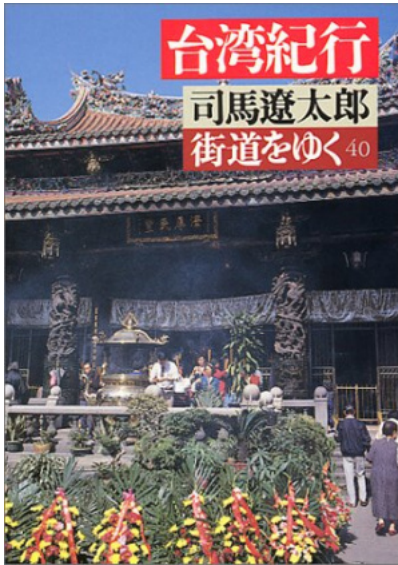


二・二八事件の時代を描いた
侯孝賢の『悲情城市』

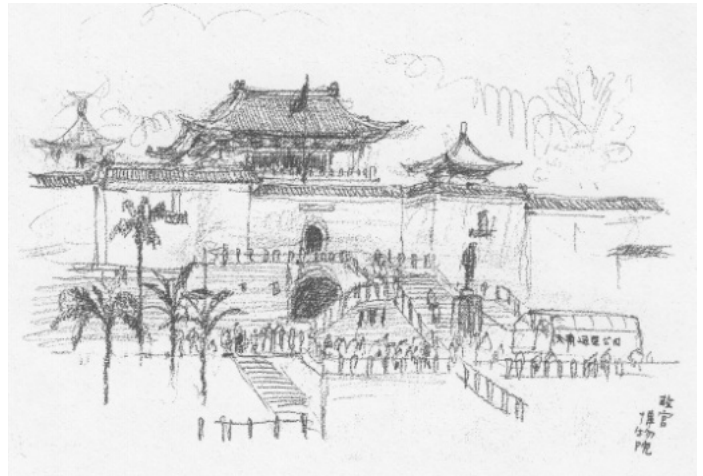
3. 司馬遼太郎『街道をゆく 40 台湾紀行』

連載・週刊朝日 1993年7月2日号～1994年3月25日号

挿画 安野光雅（あんの みつまさ）



遼



朝日文芸文庫版表紙

遼太郎の「遼」は「辽」（二点しんにょう）です

挿画 安野光雅

故宮博物院

りゅうみん

ー1. 流民と栄光 ※各節に、便宜上、通し番号を付しました。

日本では、この島のことを高砂国と呼んでいた。

“無主の地”だったという。

1609年、オランダ東インド会社、平戸に商館を置いた。

1624年、台湾南部の一港を占領、拠点にする。

※台湾北部では、スペイン人の活躍も。

この時代、その吸引力によって、漢人の渡来が増えた。

5万人との資料も。

■一方、海上には海商－海獺（かいりょう）と呼ばれた－不法勢力がいた。

明末、代表的海獺が鄭芝龍(1604-61)、そしてその子が、“国姓爺”鄭成功(1624-62)

近松門左衛門の『国性爺合戦』で知られる。

1661年、オランダを駆逐。しかし翌年死去。鄭氏政権は3代22年。

この時期、台湾の漢人開拓民は約10万人。

1683年、鄭氏政権、清朝へ帰降。清朝の版図に入ったが“化外の地”の扱い。

一部に公署を置いたりしていて、少なくとも西海岸の平野部は清国領。

■1871宮古島民台湾遭難（遭害）事件 → 1874明治政府台湾出兵

日本はあざやかすぎるほどの手を打った。

1872年、琉球王国を琉球藩にし、日本国の一藩とした。この基礎の上で、北京と交渉。

清側は口頭でもって、「台湾の蕃民は化外の者で、清国の政教はかれらに及ばない」

北京との交渉のさなか、明治政府は、不平・不満士族のガス抜きのため台湾出兵。

清国はこの討伐費を日本に支払い、支払うことで、清国は台湾東部が自国領であることを根拠づけた。

■1895年、下関条約の結果、台湾は日本領

日本の台湾統治一力のかぎりやったのは認めていい。

帝国大学を設け、教育機関を設け、水利工事をおこし、鉄道と郵便の制度を設けた。

■1949年、大陸でやぶれた“中華民国”が、国家そのものを台湾に持ちこんできた。

その間、政治的不条理のなかで住民はよく働き、外貨準備高は世界のトップクラスというまでに高水準な経済社会を築いた。

-2. 葉盛吉(ようせいきち)・伝

葉盛吉。1923年台湾に生まれ、22年間、日本人だった。きつすいの漢民族で、家庭内では台湾語といわれる福建語をつかい、戸外では標準日本語をつかっていた。戦時下、本州にわたり、旧制二高を経て東大医学部入学。敗戦、帰台。自動的に中華民國の国民となる。台湾大学医学部を卒業しマリア研究所に勤務。1950年銃殺刑に処せられる。

葉さんは、前年、姓名をなるべく日本風にという法令公布されていたこともあり、1941年、葉山達雄になった。改姓名した人は全台湾で推計十数万人いたという。

■1945年、日本降伏。蒋介石が陳儀を台湾に派遣したところから台湾の不幸・悲劇は始まった。

陳儀の部下は一兵にいたるまで小陳儀で、私利私欲しかなく、また、“征服軍”として、台湾人を無数に殺戮した。「日本時代、憲兵は拳銃を持っていたが、50年間、射ったことがなかった。官吏で汚職する者もなかった」

1949年、大陸を失った中華民國そのものが国家ぐるみ台湾にやってきた。葉さんの共産党籍が露見、逮捕された。

-3. 長老

冒頭に、台湾とは関係のない、司馬遷の『史記』「李将軍列伝」を置く。

- ・ 李登輝さんは、日本統治時代、旧制台北高校文科にすすんだ。戦況が苛烈になりはじめたころ、京都大学農学部に進んだ。司馬遼太郎さんも李登輝さんも入隊。徴兵の義務は、従前どおり、日系の者にのみあると思っていた。陳舜臣さんは適齢外で徴兵されなかった。

李登輝さんは、長老派教会の敬虔な信徒。

「60になったら牧師になって、山地に行って福音を伝えたい」

李登輝という総統を生んだ台湾島そのものが数奇なのである。

-4. でこぼこの歩道

歩行者にとって、信号は一つの目安にすぎない。信号を信頼するな、危険には自分で責任をもて。台北では、店頭の歩道は店の一部と思っている。商店ごとの私が優っている。

「蒋介石氏が大陸の万人身勝手という風をもちこんだんです」

台湾の多数派は根っからの本島人(本省人)。被支配層。英語でタイワニーズと言いたがる。

戦後40年以上、この島の支配層は、大陸からきた“外省人”。

- ・ 孫文は「中国には、ただ家族主義と宗族主義があるだけで国族主義はありません」といっている。また、孫文は「天下為公」としきりに書いた。これは『礼記』に出ている。歴代の中国皇帝は私で、公であったことがない。

その股肱(てあし)の官僚もまた私。

歴朝の私が人民にとって餓えた虎でありつづけた以上、ひとびとはしたたかに私として自衛せざるをえなかった。宗族で団結するしかなかった。

- ・ 地生えの本島人にとって、たまったものではなかった。大陸からやってきた“中華民國”がこの小さな島にのしかかり、軍と警察と秘密警察によって敵性人なみのあつかいをうけた。

■蔣経国(1910-1988)は蒋介石の長男で、台湾時代、父のもとにあつて、秘密警察を担当した。父の私物を守るしごとだったといえる。1975年、蒋介石が88歳で亡くなったあと、蔣経国はすこしずつ変わっていった。78年、総統を相続した。蔣経国は私としての権力の命数をよく知っていたようで、総統就任以前から台湾人の俊才を抜擢しはじめた。

1972年以後、アメリカや日本、西側の主要国家が、中国との国交を正常化し、台湾は孤立の影を深めた。

1985年12月、「蔣家の者が権力を継承することはない」と公言。私の放棄というべき宣言だった。そして、“台湾化政策”を進めた。死の4年前、後継者を用意した。李登輝氏を副総統にした。88年1月、蔣経国が死に、憲法の規定により、李登輝総統(1988-2000)が誕生した。その翌々年の1990年、国民大会で第8代総統に選出され、その地位は正統のものとなった。



-5. 歴史の木霊（こだま）

- 1945年、日本降伏。台湾は中華民国によって軍事占領。
1952年、日本、中華民国（蒋介石政権）との間に、「日華平和条約」締結。
1972年、日中共同声明。大平談話「日華平和条約は終了した」
- 台湾の平和と繁栄には基本的不安がある。大陸が軍事力をもって押し寄せてくるのではないか。
- 邱永漢氏は、「台湾に日本時代50年がなければ依然として海南島のレベルだったろう」といっている。
- 毛沢東の晩年、全中国のひとびとが、集会があるたびに小冊子の『毛沢東語録』をかざし、リズムカルに振っていた時期があった。「なにしろ二千年間、孔子語録（『論語』）を読んできた人達ですから」（故貝塚茂樹博士）。清朝よりもさらに“古代”だったというほかない。
産経新聞台北支局長吉田信行氏、「台北は、街じゅうが、歌舞伎町みたい」
1987年、大陸への親類訪問（“探親”）が解禁された。以後、6年間で300万人以上もの人が、大陸に帰省した。「一人のこらず台湾に帰ってきました」（吉田氏）。

-6. 二隻の船

■大陸から中華民国がやってきた。やってきた陳儀以下の軍人・官吏は宝の山に入りこんだ盗賊のように掠奪に奔走し、汚職のかぎりをつくした。「犬（日本人）が去って豚がきた」という悪口が流行った。

1947年2月28日におこった民衆弾圧は台湾戦後史の出発点をなしており、いまなお“二・二八事件”として語られつづけている。事は、ささいなことからおこった。自然発生的にはじまった民衆の抗議デモに対し、警備兵が発砲し、これに反対して暴動がふくれあがった。民衆は放送局を占拠し、全島に決起をよびかけた。大陸から援軍が着くと、陳儀は凄惨な報復に転じた。学生知識人の犠牲は五千とも二万人ともいわれている。“台湾七日民主”

-7. 李登輝さん

老台北「台湾は車優先です」。そのあたり、漢民族は機敏である。機敏を裏返せば、法や国家に頼るよりも自分の能力に頼るしかない、ということかもしれない。

大陸系は、二千万というこの島の人口のなかで、わずか十数パーセントにすぎない。が、支配階級である。さらにこの人達は、全島に戒厳令を布いた。蔣経国政権の末期になって、ようやく解かれた。

タクシーに乗って市中を走っているとき、蒋介石の巨大な銅像の前を過ぎた。銅像の基壇に「天下為公」とあったのは、冗談のような気がした。

野党の存在もみとめられ、1992年12月の選挙で、野党第一党の民進党が、大いに躍進した。民進党はいまでこそ自制しているが、当初は台湾独立を、うずうずするほど叫びたそうであった。ただ、声高に叫べば、北京が台湾に飛びかかってきて、主義もいのちも繁栄も灰になってしまう。

-8. 続・李登輝さん

李登輝さん、「植民地に対しては、宗主国というのは、自国のいいところを見せたがります。シンガポールに対する英国もそうでしたし、台湾における日本もそうでした」

そういわれてみると、古いころの日本は、国力の点では分不相応に、台北において上下水道などを完備させている。いい格好をしてみせたかったのにちがいない。

ともかくも、19世紀末まで流民・棄民の“化外の地”だった台湾がこんにち繁栄していて、大陸中国が必ずしもうまくゆかないのは、ひとつにはサイズの問題なのかもしれないのである。

李登輝さんは二十二歳まで日本人だったのだ。



李登輝總統

-9. 南の俳人たち

台湾の俳人たち。

「学徒兵戻らざりけり光復節」

「光復節未だ日語の白髪かな」

「一家三代二国語光復節」

祖父母は日本語、子の代は発音の下手な北京語、孫の代は流暢な北京語という一家の言語事情を十七文字にしたものもある。光復節は韓国は8月15日、台湾は10月25日。

台湾で一番の古刹、龍山寺。1765年建立、本尊は観音様。仏教の寺院ながら、参拝者の気分は道教的。老台北、「台湾は、観音様と媽祖様によってまもられています」

「大相撲春場所テレビに一ん日」

-10. 老台平（ラオタイペイ）

老北京をもじって老台北。老台北は蔡焜燦氏。

邱永漢氏、「中国人ほどお金に敏感な国民は他にみたことがない。金持ちだけがそうなのではなくて、貧乏人も全く同じようにお金には鋭く反応をする。中国大陆にいても、香港、台湾、サンフランシスコ、…どこにいても中国人は皆同じ反応をする。どうしてかという、…」

- ・ 台湾本島人は、「中国人」とよばれることを好まない。陳儀や蒋介石とともにやってきた人たち（外省人）を思い出してしまうと。→「台湾人（英語ではタイワニーズ）とよんでくれ」

-11. 馬のたとえ

嘉南大圳（かなんたいしゅう）の父、八田與一、さわりだけ。

- ・ 乃木希典、日本統治の初期、台湾人の反乱の鎮圧軍として渡台。

「台湾施政モ誠ニ苦々敷事許リ、人民ノ謀反モ無理カラヌ事ニ御座候」

「乞食ガ馬ヲモラヒタル如ク飼フ事モ出来ズ乗ルコトモ出来ズ」

- ・ ■ 歴代台湾総督

①樺山資紀（かばやますけのり）、一年少して辞任、②桂太郎、半年経た

ず辞職、③乃木希典、1年少して辞表、実際の台湾統治は次の④児玉源太郎（1852-1906）から始まる。児玉の台湾統治は8年（1898-1906）に及んだ。日露戦争がおこると、後藤新平（1857-1929）という逸材に総督の印をあずけ、満州軍総参謀長として出征。



朝鮮総督府は屈辱の歴史の象徴だとして、1996年末までに解体撤去されたが、台湾では今も総統府として使用されている

-12. 児玉・後藤・新渡戸（にとべ）

児玉源太郎と後藤新平が、日本領時代50年間の台湾行政の基礎をつくったといっている。

児玉の台湾における女房役になった後藤新平は、人材をさがしては、台湾に送った。その一人に、新渡戸稲造（1862-1933）がいる。アメリカとドイツで農業経済と統計学を学び、母校の札幌農学校にもどって助教授をつとめた。やがて、後藤に誘われて台湾にゆき、殖産局長兼製糖局長として、製糖による統治の経済的基礎を確立させることになった。

-13. 潜水艦を食べる話

英語で台湾のことを、ときに、「フォルモサ（Formosa）」という。16世紀頃、台湾海峡を通過していたポルトガル人がこの島を遠望し、「Ilha Formosa!（イーリャは島、フォルモーザはすばらしい）」と叫んだというのが語源だそうである。漢字訳されて、華麗島や美麗島などとよばれている。

■後藤新平が総督の兒玉源太郎とともに台湾に就任したとき、阿片吸烟者は、17万人もいたという。後藤新平は、むこう50年というながい期間を置いて、漸禁政策をとった。患者はしだいに減ってゆき、50年後にはゼロになった。

台湾では、マラリアだけでなく、ネズミが媒介するペストもたえず発生し、蔓延した。むろん、赤痢などの疫病の発生も多く、防疫思想は皆無といってよかった。後藤新平自身、医者であり、かつ内務省衛生局長や陸軍の検疫も担当して、衛生の専門家だった。後藤は、高木友枝という専門家を台湾によび、衛生行政のすべてをまかせた。

また、兒玉・後藤時代、台湾に上下水道をつくったのは土木技師浜野弥四郎である。浜野は、御雇外国人だったウィリアム・K・バルトンとともに台湾の山歩きをして水源を見つけ上下水道を設計した。二人は、台北だけでなく、台南、打狗（高雄）、嘉義などなどでも水源さがしの山歩きを続けた。このようにして、台湾の上下水道の整備は、日本内地よりはるかに早い時期に完成した。

-14. 客家（はっか）の人たち

李登輝さん、「司馬さん、僕は客家なんだ」

台湾では、福建系が多数派で、客家系は、全体の一割程度の少数派。ハッカという音は客家語。

※司馬遼太郎『街道をゆく40 台湾紀行』には、台湾の客家についての記述が少ない。

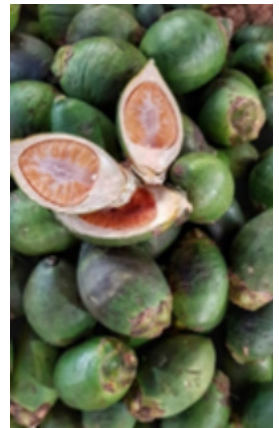
「檳榔（びんろう）」⇒

-15. 看板

市中のいたるところに、「檳榔（びんろう）」という看板が出ている。噛むと赤い唾が出る。一種のドラッグともいえる。今の女性はほとんど嗜まないが、肉体労働者の間ではまだ普通に用いるし、ヤクザ社会ではこれが一種のシンボルのようにになっている。

日月潭（じつげつたん）。

高雄で出会った「果子狸（かしだぬき クォーツ・リー）」。「あの動物は高いです。何千元もします」



-16. 魂魄（こんぱく）

田中準造氏は「湾生」（日本統治下の台湾で生まれた日本人）である。準造氏の父は、当時、台湾における有力な製糖会社の一つだった塩水港製糖の新営工場長だった。

中学生の準ちゃんは、終戦で、引き揚げて、両親の故郷の鹿児島島の田舎に帰った。敗戦が、田中一家を輝くような台湾から逐った。鹿児島県は、小学最終学年の田中準造氏にとって異邦だった。言葉も、台湾の田中家は標準語で、準ちゃんは、外国語を学ぶようにして薩摩弁を身につけた。準ちゃんにとって、故郷は台湾なのである。人生を二度やるのは、至難なことである。

引き揚げてからの両親の暮らしは、うまくゆかなかった。



「故郷」台湾を訪れる湾生を描いたドキュメンタリー映画

-17. 沈乃霖（しんないりん）先生

沈乃霖先生は、前節「魂魄」に登場する田中準造氏のこどものころの主治医だった。名医で、新営のまちの誇りだった。

高雄のホテルで、柯旗化（かきか）氏の『台湾監獄島』を読んだ。氏は、二度、台東のはるか沖にうかぶ緑島に閉じ込められた。全島が政治犯の収容島である。

- ・ 国家は蔣家の私物だったし、あらゆる官公衙のポストは、それを占有した人物の私物だった。古来、中国ではそうだったのである。

1947年、二・二八事件がおこる。沈乃霖先生にも二・二八事件があった。拷問を受け、監禁された。孫文の偉大さは、最後まで書生の気分をわすれなかったことである。

-18. 伊沢修二の末裔

この節では、まず、『40 台湾紀行』の挿画を担当した安野光雅画伯が登場する。初出誌、『週刊朝日』の読者は、毎号、氏の挿画を楽しめたのだろう。次に登場するのは、産経新聞台北市局長の門弟というべき輔仁大学の大学院生の劉中儀さんという女性だ。彼女は本島人で、系統でいえば客家に属している。彼女は、家の中では客家語を話し、友達と遊ぶときには台湾語、学校では普通話を話し成長した。

台湾にあって、明治時代、伊沢修二（1851-1917）という、教育の面で明治文化の宝石のような人物が初代学務部長として活躍した。特に、音楽教育の面で功が大きかった。この人物のことを語るのに、先の二人が絡んでくる。

-19. 海の城

台南市は、17世紀から19世紀までの台湾の治所だったから、街に気品がある。市中の名所旧蹟の一つに「赤嵌楼（せっかんろう）」がある。もとは、17世紀にオランダ人が建てた。その後、鄭成功がオランダ勢力を駆逐したあと、名を承天府とあらため、行政府としてつかった。あるいは単に兵器庫としてつかった。

赤嵌楼から、海のほうへ行ってみた。海浜に、17世紀のオランダ人が築いた城の跡がのこっている。ゼーランジャ城である。Zeelandia城。zee は英語のsea で、land は英語とかわらない。この城跡は、いまは「安平古堡」とよんでいる。ゼーランジャ城は、オランダ栄光の時代の象徴といえる。



「安平古堡」world-study.com より

-20. 海獺（かいりょう）の貴公子

台南、赤嵌楼の庭、国家の祭壇にあげられた人物がいる。四個の銅像が一群をなしており、そこに主役が居る。鄭成功（1624-62）である。ただ、この銅像には、あまりにも後世の政治意識が投影されすぎているように思える。銅像としてのかれは、心持ち背を反らせ、オランダ人の降伏を受け容れている。銅像のオランダ人は当然ながら丸腰で、肩を落とし、頭をさげている。

鄭成功の父鄭芝龍（1604-61）についてふれておきたい。明は、海禁をもって国是とした。明末、私貿易者のことを“海獺”とよんだ。明末の“海獺”は、16世紀のポルトガル人、スペイン人、さらには17世紀のオランダ人たちの海上貿易に刺激されてさかんになった。15、16世紀には、日本の倭寇を巻きこんだ。

明はこれに手を焼き、海獺のなかでも知識人ともいえるべき鄭芝龍を抱きこみ、官位をあたえた。ついには、都督にした。鄭芝龍もしたたかで自分の官権を私物化し、同僚の海獺たちをつぎつぎに倒し、富は王侯をしのぐといわれるまでになった。得意先は日本だった。長崎平戸島の大名家松浦（まつら）氏と結び、平戸城下に屋敷も構えた。やがて、平戸の武士田川七左衛門の娘をめとり、児を儲けた。のちの鄭成功である。母の名は、わからない。マツともいう。幼名を福松という。生後6年で平戸の母のもとをはなれ、福建省安平鎮にある鄭氏の居城に住んだ。二十歳のとき、南京の大学に入った。が、1644年、明がにわかに亡んだ。

以後、残明勢力の一つ、“唐王”に愛され、明の姓である朱姓をあたえられ、以後、“国姓爺”とよばれることになる。鄭芝龍と成功は、親子で明の藩屏となる。



「鄭成功議和圖」zywu0310.pixnet.netより

-21. 八田與一（はったよいち）のこと

嘉義市から台南市までの野は、嘉南平野とよばれる。まことにひろびろとしていて、山が霧でかくれている日など、一望の平野に見え、大陸にきたかと思わせるほどである。が、この大平野は、二十世紀のある時期までは、不毛の大地だった。理由は、溪とよばれる河川の数がすくなくすぎたことにあった。

日本領時代に、八田與一という土木技師がいて、この平野を美田にしようとし、成功した。大正時代のことである。

烏山頭水庫を造り、その水を、1万6000キロに及ぶ水路を引き、嘉南平野にくばった。この巨大な水利構造を嘉南大圳（かなんたいしゅう）という。

八田與一は、1910年、東京帝大工科大学土木科を卒業し、ほぼ同時に、台湾総督府土木局につとめた。八田が赴任してほどなく、日月潭で官営水力発電の調査と設計もはじまった。当時の台湾は、土木の新天地だった。

八田與一の生涯はながくはなかった。太平洋戦争のさなかの1942年、陸軍に徴用されてフィリピンにむかう途中、乗船が米潜水艦に撃沈され死んだ。56歳だった。三年後に妻、外代樹が、烏山頭ダムの放水口にむかって身を投げ、あとを追った。

-22. 珊瑚潭（さんごたん）のほとり



珊瑚潭のほとり 八田の墓と像 blog.xuite.netより

珊瑚潭（さんごたん 烏山頭ダムでできた貯水湖）の八田與一とその妻外代樹の墓は、疎林でかこまれて、木漏れ日が赤土の上に落ちている。與一の命日は5月8日である。毎年この日には嘉南農田水利会のひとびとによって、墓前祭がいとなまれているという。

工事は1920年にはじまり、1930年におわった。わずか10年で完工したのは、当時の日本としては高水準の土木機械が投入されたことにもよる。工事にさきだって、烏山頭までの道路や鉄道、さらには送電線などが整備された。烏山頭には宿舍街が建設され、小学校や病院もつくられた。烏山頭の現場では、大小多くの機関車が働いていた。

墓は、日本人が台湾からひきあげてしまった1946年12月15日に建てられた。

-23. 鬼（クイ）

日本の鬼と中国の鬼はずいぶんと違う。普通話で鬼はgui（三声）。

「台湾には、どんな小さな田舎にも、万（萬）善堂という祠があります。ゆきだおれの人の骨をあつめて供養するお堂です」

-24. 山川草木

高雄に入ったとき、直線的な街衢（がいく）をみて、都市計画の基本どおりという印象を持った。

「札幌に似ています」

“たかお”というの、もとは山地人の地名だったタアカオ社からきている。おそらく、17世紀ごろの漢人が、“タアカオ”という発音を聞いて「打狗（タアカオ）」という漢字を当てたかと思える。※「タアカオ」は山地人のことばで、竹林を意味した。日本統治の時代、1920年、高雄にあらためた。

元来、この港は浅かった。清の乾隆29（1764）年に編まれた『台湾府志』にも「大商船ノ停泊スルナシ」とある。

高雄港が近代的な港湾として築港工事されるのは、1908年からである。いまは、ドックが七つか八つもあり、世界有数の貿易港になっている。

-25. 嘉義（かぎ）で思ったこと

嘉義市の南郊に、北回帰線が通っていて、路傍に大きな碑が立っている。もう一つの碑を見た。近づくと、二・二八事件の記念碑であることがわかった。台湾に自由の世がきたということである。もっとも自由の歴史は、まだ五年でしかないが。

清朝時代、多くの反乱があった。特に、1786-87年の林爽文の乱は大きかった。林は農民で、大きな秘密結社の幹部だった。このまち諸羅（嘉義）のまちには城壁がそなわっていた。このまちの守備司令官と住民四万は城にたてこもり、大陸からの援軍に呼応、反乱軍を破った。乾隆帝は住民の守城の忠をたたえ、一詩をつくった。

この後、諸羅は「義ヲ嘉ス」すなわち「嘉義」とあらためられた。

私が台湾にゆききしているうちに、いい本が出た。伊藤潔氏の『台湾』（中公新書）である。視力のいい本で、たとえば、台湾が日本領になったとき、日本は台湾住民に対し、二年間の猶予つきで国籍の選択の自由をあたえたという。



「二・二八事件記念碑」(嘉義市)
ja.wikipedia.org より

-26. 山中の老人

台湾の東半分は、大山塊である。19世紀まで山地人の天地だった。台湾原住民は単一の民族ではなく、諸族はたがいに言語が通ぜず、文化もちがう。当初、漢民族はかれらのことを、「蕃」とよんだ。また、漢民族の文化になじんだ者を熟蕃といい、なじまない者を生蕃とよんだ。台湾の日本時代、清朝の言い方を踏襲して熟蕃・生蕃とよんでいたが、やがて高砂族とよぶようになった。中華民国になってから、“高山族”とよばれるようになった。いまは山地人・山地同胞という安定したよび方がある。もっとも、山地人のほうは自らを「原住民」と呼ぶことを主張しつつけている。山地人は、若い人はともかく、諸族間では言語が通じない。だから、諸族間の交渉は、いまなお日本語が用いられるという。

路傍の木陰に、山地人の老人とその孫娘が雨を凌いでいたので、乗せた。降りるとき、この“元日本人”は、「日本人の魂を忘れるな」といった。

-27. 日本丸（にっぽんまる）が迎えに

“日僑”とよばれていた留用学者が台湾を引揚げたのは、1949年8月だった。日本から迎えにやってきたのは、商船大学の練習船「日本丸」で、船名が象徴的といえる。

-28. 浦島太郎たち

山中のホテルで、佐藤愛子さんの『スニヨンの一生』（文藝春秋刊）を読んだ。“高砂族”出身の兵士だった中村輝夫一等兵（アミ族としての名は、スニヨン）の生涯について書かれている。彼の入隊は志願であった。

昭和十八年(十七年?)、台湾の“高砂族”に対し、特別志願兵制度というものが施行された。

中村一等兵が、モロタイ島のジャングルで発見されたのは1974年12月だった。島では、毎日、起床後の洗面、宮城遙拝、体操から始まり、規則正しい生活だったという。

また、帰台したとき、政府によって、すでに、李光輝という名に変えられていた。

-29. 大恐慌と動乱

日本の“国家神道”というのは、明治初期政権の産物である。それ以前の神道とはちがい、ご利益はない。それを、固有の信仰をもつ台湾や朝鮮、あるいは南洋諸島にまでひろげたのは、乱暴だったといえる。台湾神社、台南神社、台東神社などがそれである。台湾神社は1901年に創建された。

1944年、台湾神宮に改称。台湾の総鎮守として、台湾でもっとも重要な神社とされた。

1936年、予備役海軍大将小林躋造（せいぞう）が、台湾総督に任命された。この小林総督時代に、特に神社参拝が強制された。各家庭には祖先祭祀に代えて伊勢大神宮の奉祀を強要した。

-30. 寓意の文化

ロンドンにMRGという、世界のひとびとの人権をまもる組織の本部がある。その本部から、ジョージナ・アシュワースという人の編で『ワールド・マイノリティーズ』という本が刊行されている。日本でも訳され、『世界の少数民族を知る事典』（明石書店）として刊行されている。その本にあっては「台湾人」が少数民族の項にはいつている。

-31. 山人の怒り

霧社事件

霧社事件は、日本統治時代における山人による最後の大反乱だった。事件は、1930年10月におこった。霧社の山人の多くはタイヤル族だった。

日本統治がはじまると、いちはやく協力したが、反面、日本化を頑固にこばむところがあり、日本の官憲に、目のかたきにされた。針や塩などの交易品が入らないように山を封鎖するなど、霧社へのいじめは続いた。

他の郷国を植民地にするということは、その地で生きているひとびとの存在としての自尊心・誇りの背骨を石で砕くようなものである。山人、とくにタイヤル族は自尊心・誇りが強かった。

事件前、霧社には、小学校、郵便局、診療所ほかさまざまな“文明”の施設があった。

日本統治時代、日本人警官が行政の末端にいた。なかには、国家の権威をカサに着て、大変な威張りようで、台湾人たちはひそかに「土皇帝」と、よんでいた。

霧社にモーナ・ルーダオという、英雄的、闘争心あふれた頭目がでた。

日本側は、官民老若男女含め134人が殺された。決起側は女子供約140人が集団自決した。

※1915年、「西来庵事件（「タバニー事件」）。866名に死刑判決が下されたが、大正天皇即位の恩赦で、95名の処刑にとどまった。



映画『セデック・バレ』公式サイトより

-32. 大野さん

プユマ族の首長、大野さんのこと。

大野さんは1910年生れで、もう83歳になる。大野夫人は、「大正10（1921）年生れです」と、端正な日本語で答えてくださった。

-33. 千金の小姐（シャオチエ）

戦前の甲子園大会における台湾の嘉義農林学校の野球の名声は、こどものころから聞きおよんでいた。

阪神間に甲子園球場ができたのが、甲子（きのえね）どしの1924年であった。そのとし、すでに第十回を迎えていた全国中等学校優勝野球大会がこの球場で開催された。

むかしからプユマ族が耕している台東の野から嘉義農林の名選手が出た。日本統治時代の名を上松耕一（あげまつ こういち）といった。1931年、上松少年の嘉義農林は甲子園に出場し勝ち進んで準優勝になった。少年は遊撃手だった。卒業後、横浜専門学校に入り、卒業してから嘉義の自動車会社に入社した。かたわら母校の嘉義農林にたのまれ野球部の指導をした。

上松耕一は、結婚後、台東にもどって山人のための学校を多く建てた。戦後、陳耕元という名になった。いまも、“校長先生”の名で語り継がれている。この節の題、「千金の小姐」とは、妻蔡昭昭さんのことである。この夫婦のご子息陳建年氏は台湾省議会議員である。

蔡昭昭さん、「日本はなぜ台湾をお捨てになったのですか」



-34. 花蓮 (かれん) の小雨

1895年に日本統治時代がはじまって花蓮港庁が置かれたときは、処女地に近かった。

「ぜひ花蓮へお行きなさい。街並みが戦前の日本の町のようにすよ」

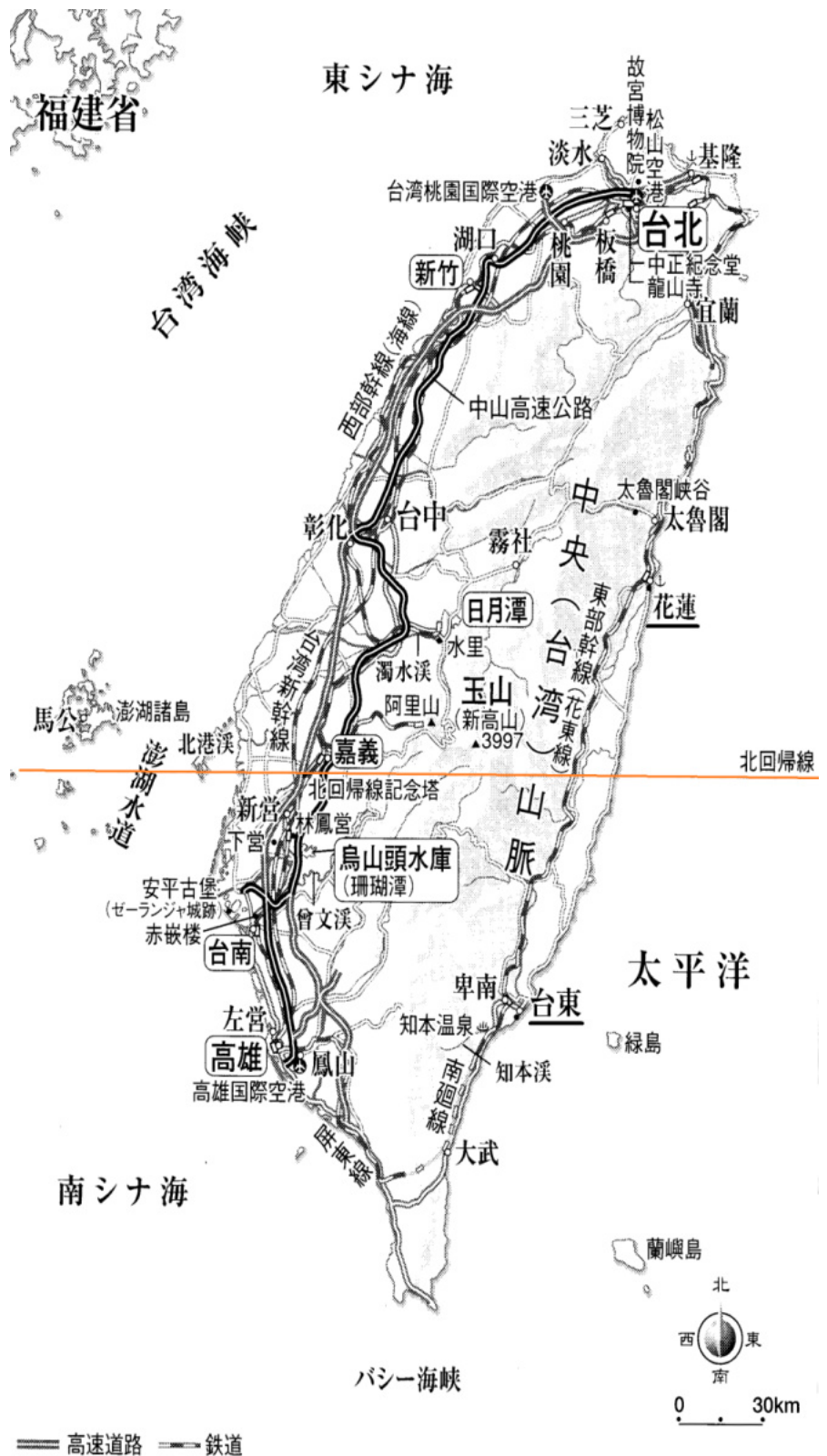
-35. 太魯閣 (タロコ) の雨

この紀行は花蓮のまちでおわる。

「このまちでは、お寺はいまでも日本語のまま“おてら”です」と土地の作曲家の林道生氏はいった。

阿水さんは1934年うまれで、日本の敗戦のとき小学校五年生だったという。だから、日本語が話せる。「六年生のときから北京語ならったよ。漢字のわきに日本語のカタカナをつけてね」

花蓮には、太魯閣という断崖と絶壁と急流の景勝がある。かつて山地人が九グループにわかれて狩猟生活を営んだ山である。台湾の話、これでおわる。脳裏の雨は、降りやまないが。



【参考文献】

- ・伊藤潔著『台湾』（中公新書）
- ・野嶋剛著『台湾とは何か』（ちくま新書）
- ・野嶋剛著『タイワニーズ』（小学館）
- ・蔡焜燦著『台湾人と日本精神』（日本教文社）
- ・小林よしのり著『台湾論』
- ・玉岡かおる著『お家さん』（新潮文庫）
- ・中川昌郎著『中国と台湾』（中公新書）
- ・東山彰良著『流』（講談社）